

魂の喪失：J. M. G. ル・クレジオの『パワナ』を巡って

Soul loss: a study of J.M.G.Le Clézio's *Pawana*

櫻井典夫

Norio SAKURAI

0. はじめに

『パワナ』(*Pawana*, 1992) はル・クレジオ (Jean-Marie Gustave Le Clézio, 1940-) が1992年に発表した短編小説で、19世紀半ばのアメリカ大陸沿岸における商業捕鯨に材を取っている。捕鯨船リオノー号の船長チャールズ・メルヴィル・スカモンは、クジラたちが出産のために集まる伝説の潟湖を求めて出航し、首尾よくそれを発見するのであるが、この発見は結果としてクジラの大量虐殺と潟湖の荒廃をもたらしてしまう。表題である「パワナ」とは、アメリカの先住民であるナティック族の言葉で「鯨」を意味している。

1980年代半ばから1990年代初頭は、温暖化や酸性雨、オゾン層破壊等の環境破壊の問題を背景に、環境問題に対する社会の関心が爆発的に高まった時代であった。このような環境ブームの高まりのなかで発表された『パワナ』もまた、環境問題と関連した側面を持つ作品である。その構想の背景には、メキシコ政府と三菱商事の合弁会社が進める塩田事業が存在したのである¹。塩田の拡張が予定されていたメキシコのサンイグナシオ湾は、世界的に有名なコククジラの出産地であり、この地に塩田を設けることは、クジラから出産と子育ての場を奪うこと、つまりはクジラに死をもたらしことにほかならない。ル・クレジオは100年前の悲劇に仮託しながら、当時進行中であった塩田事業の拡大に異を唱えていたのである。

このように『パワナ』は、当時隆盛を極めていたエコロジーの思想とも無縁ではない。この点を捉えて、ル・クレジオを時流に乗った作家であるとか、あるいは「メディアの寵児²」として批判することも可能であろう。しかし、ル・クレジオの活動を仔細に辿るのであれば、この批判は不当なものであることがわかる。なぜなら、ル・クレジオの環境問題への関心は、エコロジーブームに便乗したご都合主義的な性質のものではなく、20年以上に渡

¹ 2009年12月2日に北海道大学で行われたシンポジウム「先住民の語りと文学—ル・クレジオさんを迎えて」におけるル・クレジオ自身の発言による。

² Bruno Thibault, 《Avant-propos》, in Bruno Thibault et Keith Moser (dir.), *J.-M. G. Le Clézio Dans la forêt des paradoxes*, l'Harmattan, 2013, p.11.

る思索の成果だからである。この点を説明することが本稿の目的の一つとなる。

また、確かに『パワナ』にはエコロジー的側面があるとしても、それを「エコロジーの平面に閉じこめてしまったのでは、『パワナ』の魅力のいちばん大事な部分を見落すことになるだろうし、ル・クレジオの作意をゆがめることにもなる³」という指摘は正鵠を得たものである。このことを認めたうえで改めて問うてみたいのは、では、エコロジーの平面には収まりきらない「ル・クレジオの作意」とは、いったいどのようなものなのか、ということである。ル・クレジオの活動との関連において『パワナ』を読み返し、この問いに答えを出すことが本稿のもう一つの目的となる⁴。

1. 「インディオ体験」について

今日ではおよそ半世紀に渡るル・クレジオの活動において、作品の舞台や登場人物、物語を織り成す文体は様々な変化を見せてきた。

1963年に発表されたデビュー作『調書』(*Le Procès-verbal*, 1963) や、後続する『発熱』(*La Fièvre*, 1965), 『大洪水』(*Le Déluge*, 1966) では、都会に暮らす(一風変わった)青年たちの生態が描かれた。彼らに共通するのは、自身の感覚に対する異常なまでの執着である。初期ル・クレジオ作品の主人公たちは、諸感覚の統合によって与えられる平穏な世界に安住することができず、意図的な感覚の攪乱を通じて、意識が発生する以前の混沌へと立ち返ろうとするのである。それはいわば、世界現出の地平に到達しようという無謀な試みであり、その絶望的な試みの最中、主人公たちは、「狂気」へと沈潜していくのである。このような自己破壊的な衝動と、それに伴う緊張と悲劇とが、初期のル・クレジオ作品に共通する

³ 菅野昭正「楽園に入れなかった老人—解説」(ル・クレジオ『パワナ—くじらの失楽園』, 菅野昭正訳, 集英社, 1992年, 140頁。)

⁴ 1963年の『調書』によるデビュー以来、ル・クレジオは年間1冊に近いペースで作品を発表し続けている。その膨大な作品群にあって、『パワナ』は比較的短い作品の一つに数えられる。そうした理由もあり、これまで『パワナ』を本格的に扱った先行研究はそれほど多くはない。そのうち主だったものとして以下の研究が挙げられる。

①Sophia Haddad-Khalil, *La Rêverie élémentaire dans l'oeuvre de J. M. G. Le Clézio (Le Procès-verbal, La Fièvre, Désert, Onitsha, Pawana)*, Septentrion, 2002.

②Sabrinelle Berdrane et Cathrine Douzou, «Le Partage de la parole: Pawana Le Clézio/Lavaudant» in Thierry Léger, Isabelle Roussel-Gillet et Marina Salles (dir.), *Le Clézio, passeur des arts et des cultures*, PUR, 2010.

③Duarte Mimoso-Ruiz, «Ambiguïté et paradoxe du récit Pawana (1992): Le Clézio serait-il un «anti-Melville»?», in Bruno Thibault et Keith Moser (dir.), *J.-M. G. Le Clézio Dans la forêt des paradoxes*, l'Harmattan, 2013.

これらはそれぞれ、先行するル・クレジオ作品との比較(①)、劇作家ジョルジュ・ラヴォダンによって脚色された戯曲『パワナ』との比較(②)、捕鯨を題材とした金字塔的作品であるメルヴィルの『白鯨』との比較(③)において『パワナ』を分析したものであり、本稿の論点との重なりはない。

特徴であり、その魅力でもあった。

ところが、1970年代の半ばに至り、ル・クレジオの作風は明確な変化を見せるようになる。この時期には、60年代の作品に支配的であった不安や狂気、都市の喧騒は鳴りをひそめ、幼い主人公たちが自然と戯れる様子が、穏やかな筆致で描かれるようになるのである。かつてあれほど待望されたカオスの到来はもはや期待されていない。この時期を境に、ル・クレジオの関心は均整の取れたコスモスの表現へとシフトしていくのである。それはつまり、先行作品により構築された世界観の修正を迫る極めて大きな変化が、この時代のル・クレジオの活動に生じたということである。

なぜ、このような変化が生じたのであろうか。その要因の一つとして、アメリカの先住民文化に対する関心を挙げることができるだろう。

1967年、兵役代替義務を完遂するためにメキシコへ赴任したル・クレジオは、その地で出会ったアメリカ先住民の文化に強い関心を抱く。その関心が嵩じた結果、1970年から1974年にかけて、ル・クレジオは、パナマのジャングルに暮らす先住民と生活を共にすることになるのである。この体験が、ル・クレジオの人生に極めて大きな変化をもたらしたことは、1997年に発表されたエッセー集『歌の祭り』(*La Fête chantée*, 1997)に読み取ることができる。

20年ほど前のこと、1970年から1974年まで、ぼくはパナマのダリエン地方に住むアメリカ先住民の人々、エンベラ族およびその親族にあたるワウナナ族と、生活をともにする機会を得た。この経験は、ぼくの人生をすっかり変えた。世界および芸術についての考え方、他の人々との付き合い方、歩き方、食べ方、愛し方、眠り方、さらには夢にいたるまで、すべてを変えた⁵。

ル・クレジオの人生を根底から覆したこの体験を、ここで便宜的に「インディオ体験」と呼ぶことにして、『歌の祭り』におけるル・クレジオの証言をさらに追ってみたい。

そのころは、ぼくはエコロジーにも関心がなかったし、アメリカ先住民たちの過去についてもほとんど何も知らなかった。ぼくは大都市の攻撃的な生き方を逃れ、まだ何とも知れない何かを探し求めていた⁶。

本稿との関係で注目したいのは、この引用においてル・クレジオが、エコロジーへの関心の芽生えを（間接的にはあるが）「インディオ体験」による変化の一つに数えているということである。この事実を鑑みるのであれば、『パワナ』におけるエコロジカルな主題の選択も「インディオ体験」の影響下になされたものと推察することができるだろう。だが、それでは「インディオ体験」とエコロジーへの関心は、いったいどのように結びつくのであ

⁵ J. M. G. Le Clézio, *La Fête chantée*, Le Promeneur, 1997, p.9. 日本語訳は、管啓次郎訳『歌の祭り』、岩波書店、2005年。以下『歌の祭り』の引用は、原則として管氏の訳文を使用させていただいた。

⁶ *La Fête chantée*, p.10.

うか。

2. 「エコロジズム」の本質としての「シャーマニズム」

ル・クレジオの人生を大きく変えた「インディオ体験」について、ル・クレジオは多くを語っていない。とはいえ、「インディオ体験」に関する断片的な情報には、ある種の共通点を見出すことができる。これらの情報はどれも、インディオの「シャーマン⁷」のもとでの体験を語っているのである。例えば、『歌の祭り』という書名は、ル・クレジオ自身が「エンペラ族ならびにワウナナ族の生活で、もっとも強烈なとき⁸」と表現する「ベカ」という祭りに由来している。この祭りを通じて、シャーマンたちは病気の治療を行うのである。この儀礼に参加したル・クレジオは、それが、自身の生き方の根本的な変革を迫る、強烈な体験であったと述べるのであるが⁹、このことから、ル・クレジオの「インディオ体験」にあって、シャーマニズムの体験がとりわけ重要な位置を占めていることが理解できるだろう。

さらに興味深いのは、ル・クレジオは、インディオのシャーマニズムを、外部から観察しただけではないということである。ル・クレジオ自身の証言によれば、彼はエンペラ族のシャーマンから秘儀を伝授されているのである¹⁰。この体験をもとに、1970年代には、『悪魔祓い』(*Haï*, 1971)や『瞳孔拡大』(*Mydriase*, 1973)といった作品が発表されるのであるが、1980年代になると、ル・クレジオは個人的なシャーマニズムの体験について口を閉ざすこととなる。

ただしそのことは、シャーマニズムへの関心が薄れたことを意味する訳ではない。この時代には主に、今日の社会・文化的な文脈におけるシャーマニズムの意義が考察されるのであり、その成果は、1988年に発表された『メキシコの夢』¹¹ (*Le Rêve mexicain*, 1988) にまとめられている。

『メキシコの夢』は、その名が示唆するとおり、メキシコに関する7つのエッセーによって構成されている。『メキシコの夢』の主眼は、年代記に残された断片的な記録を頼りに、「呪術的」な世界の復元を試みることにあるといえよう。ル・クレジオは、古代の書物から、メソアメリカ文明を特徴付ける神々と人間の深いつながりを読み取ろうとするのである。そ

⁷ *Ibid.*, p.17.

⁸ *Idem.*

⁹ *Ibid.*, p.22.

¹⁰ *Magazine littéraire*, N°362, février 1998, p.33.

¹¹ J. M. G. Le Clézio, *Le Rêve mexicain ou la pensée interrompue*, Gallimard, 1988. 日本語訳は、望月芳郎訳『メキシコの夢』、新潮社、1991年。以下、引用は望月氏の訳を使用させて頂いた。

のつながりは、例えば、神々に捧げられるおびただしい生贄の血となって可視化されるものであった。生贄の血は、神々の要請に従い、地上の生を存続させるために流されるものであり、それはいわば、運命に対する人間の忠実さの証であった。生贄の儀礼は、それがいかに残酷に見えようとも、古代メキシコの民にとっては、自身の存亡を賭けた極めて切実で重要な行為だったのである。ところが、人間中心的世界観へと移行しつつあった16世紀の征服者たちには、呪術の世界に息づく神々と人間の絆を理解することはできなかった。征服者たちは、インディオたちが執り行う生贄の儀式を悪魔的な退廃とみなし、軽蔑した。その理由をル・クレジオは、「征服者たちにとって、流される血とは大地をも天空をも潤すものではなく、地上の財産、黄金、奴隷、スペイン国王のためのものであった¹²」ためだと説明する。

神々のために流される血と、地上の富のために流される血、これら二つの血の価値の相違に、呪術的思考と合理的思考の本質的な相違が象徴されているとル・クレジオは考える。征服者たちの極めて現実的で合理的な価値基準に照らせば、不可視の世界との結びつきに立脚したインディオの呪術的世界は、非現実的で非合理以外の何ものでもなかった。

インディオの狂信は、16世紀の合理主義的なヨーロッパから来たスペイン人にとって、しばしば愚弄の対象となった。征服者たちは、インディオの祭祀と祈りを迷信であるとして軽蔑した。インディオと「理性ある人々」との区別はここにもう現われており、それは今日まで続いている¹³。

結果としてインディオの呪術は、征服を推進し、またそれを正当化するための口実ともなったのである。

このようにル・クレジオは、16世紀のメキシコで起きた歴史的事件を、合理的思考と呪術的思考の対決として捉え直そうとするのであるが、その語り口からは明らかに、呪術の世界への肩入れをうかがうことができる。ル・クレジオは、「理性ある人々」によるインディオの蔑視を不当なものと非難するのである。そのため『メキシコの夢』はその発表当初より、野蛮擁護の書物という批判を浴びることにもなった¹⁴。

とはいえ、ル・クレジオが呪術的世界の再興を期するのは、懐古趣味や異国趣味、ましてや野蛮礼賛によるのではない。ル・クレジオはインディオの呪術的思考を、過去の遺物としてではなく、現代世界にとって極めて有用な価値を持つものとして評価するのである。そのことは、『メキシコの夢』の終末部分に述べられた、以下の言葉から読みとることができる。

インディアンはシャーマニズムの相続が魔術根絶者たちによって打倒されなかったら、日常生活における夢と恍惚を統合し、ある均衡に到達することが許されたであろう。

¹² *Le Rêve mexicain*, pp.81-82.

¹³ *Ibid.*, p.89.

¹⁴ 『現代詩手帖特集版 ル・クレジオ 地上の夢』、思潮社、2006年、249頁。

今日、われわれの西欧文明がアメリカインディアンの哲学的・宗教的テーマを再発見しようとしているのは決して偶然ではない。なぜならば西欧人は不均衡状態の中に位置し、自らの暴力にひきずられているからであり、彼らが破壊した文明の美と調和をつくっていたものすべてをもう一度創造しなければならぬからだ¹⁵（下線は引用者。これ以降の引用に見られる下線についても同様。）。

引用においてル・クレジオは「西欧人は不均衡状態の中に位置し、自らの暴力にひきずられている」と述べているが、この時代には、西欧世界の暴力が自己破壊的に作用していることがますます明白となっていた。当時俄かに騒がれた環境問題は、その最たる例だろう。こうした状況のなか、西欧世界に迫る危機を回避するために、インディオの呪術的な思考の助けを借りる必要があると、ル・クレジオは訴えているのである。

こうしてみると、ル・クレジオのエコロジーへの関心は、今日の社会・文化的な文脈におけるシャーマニズムの意義を考察するという、『メキシコの夢』の主題と密接に結びついていることが理解できるだろう。それでは、19世紀の商業捕鯨を扱った『パワナ』において、その主題はどのように展開されることになるのであろうか。

3. 「黄金郷（エル・ドラド）」から「伝説の潟湖」へ

1856年、チャールズ・メルヴィル・スカモン船長率いる捕鯨船リオノー号は、メキシコ領カリフォルニアのプンタ・プンタを離れ、南の海域へと向かった。スカモン船長の目的は、極地のクジラたちがすべて集まるといわれる「伝説の潟湖」を探すことであった。

ある日のこと、甲板の上で物思いに耽っていた船長は、その傍らで海を見つめる少年水夫の存在に気付く。少年は、ナンタケットのジョンという名で、これが彼にとって初めての航海であると語る。そのジョンに対して、スカモン船長は以下のような言葉をかける。

なぜか分らないが、私はこう言った。「私はだな、私は黄金を探しにきたんだよ。黄金は見つからなかったが、それで鯨捕りのためにこの船を借りきったのだ。もし、克鯨たちの隠れ場が見つければ、私たちはとてつもなく金持ちになれるんだよ、分るかな？」。

少年の眼差しは妙なくあいに輝いていた¹⁶。

これは、ジョンとの会話を通じて、スカモン船長自身にも意識されていなかった欲望が明らかにされた場面である。その欲望とは「金持ちになる」欲望である。

さらに、スカモン船長の科白中、「鯨捕り」が「黄金探し」の延長上に位置づけられていることにも注意したい。この場面で語られるスカモン船長の経歴は、彼のモデルとなった同名の人物、チャールズ・メルヴィル・スカモン（1825-1911）の経歴を踏まえたものである。

¹⁵ *Le Rêve mexicain*, p.247.

¹⁶ J. M. G. Le Clézio, *Pawana*, Gallimard jeunesse, 2008, p.41. 訳は菅野氏による。

チャールズ・メルヴィル・スカモンは、アメリカの捕鯨家、海洋生物学者で、バハ・カリフォルニアのビスカイノ湾の奥深くに存在するオホ・デ・リエブレ潟湖、通称スカモン潟湖の発見者としても知られている。米墨戦争の結果獲得されたカリフォルニアで黄金の存在が認められ、ゴールドラッシュが始まったのは1849年、チャールズ・メルヴィル・スカモンが西海岸にやってきたのは、その翌年の1850年である¹⁷。その後、捕鯨船の船長へと身を転じたスカモンは、件の潟湖の発見によって、その名を歴史上に刻むこととなる。引用の場面では、この史実を巧みに取り入れながら、「伝説の潟湖」を探し求めるスカモン船長の情熱が、黄金を求める欲望の延長上に置かれているのだといえよう。

一方、船長の相談相手である一等航海士のロイスによれば、クジラが集まる「伝説の潟湖」とは「象の墓場やアマゾネスの国を信じている人たちの空想のなかで生まれる産物¹⁸」でしかなかった。この挿話において触れられる「アマゾネスの国」であるが、『パワナ』の舞台となるカリフォルニアの地名が、アマゾネスの女王カラフィアが君臨するとされた地上の楽園に由来していることを踏まえるのであれば¹⁹、この挿話は、スカモン船長の黄金熱を、新大陸の征服事業に結びつける役割を果たしているものと考えることができる。

1533年にコルテスの命を受けてバハ・カリフォルニアに上陸したフォルテュン・ヒメネスによると、1541年にこの半島の両岸を探検したフランシスコ・デ・ボラニョスによるとも言われているが、カリフォルニアの命名が、黄金を求めて推進された新大陸の征服事業と密接に関連していることは確かである。新世界そのものが「征服すべき最強の女性」と見られ、その「最強の女性を征服しないと、黄金郷（エル・ドラド）へは辿り着けない」と考えられていたのである²⁰。1848年、そのカリフォルニアにおいて黄金が発見された際、「ニューヨーク・ヘラルド」紙は、「カリフォルニアに黄金郷！ その昔、スペイン人がアメリカで見つけた黄金郷、ついに発見」と報じたという²¹。「黄金郷」の伝説が巧妙に利用されることで、人々の黄金熱は一層激しくかきたてられたのである。

こうした歴史的背景を踏まえるのであれば、ゴールド・ラッシュに始まるスカモン船長の黄金熱は、「アマゾネスの国」を媒介とすることで、「黄金郷」を求める征服者たちの情熱に結びつくことになるだろう。この点に『パワナ』と『メキシコの夢』のつながりを透視することが可能である。

¹⁷ 菅野昭正「楽園に入れなかった老人」, 122頁。

¹⁸ *Pawana*, p.36.

¹⁹ 越智道雄『カリフォルニアの黄金 ゴールドラッシュ物語』, 朝日出版社, 1990年, 209～210頁。以下のカリフォルニアに関する記述もまた同書を参照した。

²⁰ 同上, 210頁。

²¹ 同上, 10頁。

4. アメリカスの破壊に始まる生態学的破局

既に見たように『メキシコの夢』においてル・クレジオは、神々のために流される血と、地上の富のために流される血、この二つの流血の相違に、呪術的思考と合理的思考の本質的な相違が象徴されていると考えていた。この相違はまた、インディオと征服者のあいだの黄金観の相違にも見られるものである。

ルネサンスのヨーロッパからやってきた征服者たちをアメリカ先住民世界と決定的に分離するもの、それは呪術だ。暴力により奪われた宝物、インカ以前の戦利品は、地上的権力を表すものではなかった。古代ペルーの黄金のうちに輝くのは、第一の火、太陽の永遠だ。黄金―地表に露出したり川の中を塊をなして転がったりするあの黄金―は神の現存の証拠だ。先住アメリカの人びとの多くが、黄金にこんな奇妙な名前を与えている。太陽の糞。金属である以上に黄金とは神の実質であり、その熱であり、その永遠なのだった²²。

インディオたちの呪術的思考にあって黄金が価値をもつのは、それが「神々のものであり、神々の宝²³」だからである。アメリカの先住民たちにとって黄金は神の性質を帯びた物質であった。だから、この金属がインディオたちによって通貨として使われることはなかった。「地上の交換には、種子や貝殻や布を使えばたりる²⁴」のである。一方、合理的思考に立つ征服者にとっては、黄金は「地上的権力」の象徴であり、個人的な所有の観念と結びついていて、「黄金のゆえに、彼らは抵抗する者を片っぴしから殺し、滅ぼし、拷問にかけた²⁵」のである。コンキスタドールも、スカモン船長も、「金持ちになる」という極めて即物的な欲望に衝き動かされている点で本質的に変わりはない。そしてその欲望に引き摺られた結果、『メキシコの夢』ではメソアメリカ文明の破壊が、『パワナ』においては、クジラ的大量殺戮が引き起こされるのである。

『パワナ』ではさらに、「伝説の瀉湖」の発見に続いて環境の破壊がもたらされた様子が描写されている。

日が昇ると、虐殺がはじまり、それは正午までつづいた。ボートが瀉湖からもどり、巨大な牝鯨の身体を瀉湖の外へ、母船まで引っぱっていった。いまや、そこはもう世界の始まりのときから存在したままの、名もない、秘密の場所ではなくなっていた。瀉湖の片隅も、入江も、砂洲もそれぞれ名前がつけられていた。ある鉾打ちの名前が、ある船員の名前がつけられ、クーパー湖があり、豊魚沼があり、砦湖があり、大岩があり、本瀉湖があり、堤防があり、新港があり、塩田地区があった。人間たちが、奥の奥まで湖をすっかり所有していた²⁶。

瀉湖の発見に伴う環境の悪化を描写したこの箇所では、名づけという行為を通じて、環境

²² *La Fête chantée*, pp.138-139.

²³ *Le Rêve mexicain*, p.25.

²⁴ *Ibid.*, p.139.

²⁵ *Ibid.*, p.24.

²⁶ *Pawana*, pp.62-63.

破壊とアメリカの征服事業の連続性が暗示されている。『メキシコの夢』では、黄金を求めて新大陸に分け入る征服者たちが、その途上、次々と名づけの行為を行っていったことが言及されている。テルミノス湾、グリハルバ河、サン・マルティン湾、サクリフィシオス島等々、土地に根ざした生活上の要請とは無縁に、超越的になされていくこの命名行為もまた、「新大陸」で征服者たちの振るった暴力の一つであった。

引用に暗示される「新大陸」の征服と環境破壊の本質的な連続性は、『歌の祭り』において、さらにはっきりと示されている。ル・クレジオは「南北アメリカ大陸およびカリブ海[アメリカス]の征服と土着の民族の敗北は、最初から、一連の生態学的破局を意味してきた。その結果はいまなお、現代世界においても感じられる²⁷⁾」と述べているのである。

こうしてみると『パワナ』には、実在するチャールズ・メルヴィル・スカモンの経歴や、「黄金」の象徴的価値、「アマゾネスの国」の逸話や名づけの行為等を通じて、メソアメリカ文明の破壊と環境の破壊が、本質的には同種の暴力によってもたらされたことが暗示されているのだといえるだろう。その意味において、スカモン船長は、16世紀のコンキスタドールの精神的な末裔ともいうべき存在である。スカモン船長にとっての航海の目的は「金持ち」になることであり、「伝説の潟湖」の探索は、その目的を実現するための手段に過ぎなかったのである。一方、捕鯨船リオノー号に乗り組んだナンタケットのジョンの目的は、それとはまったく異なっていた。

5. 商業捕鯨と伝統捕鯨

ナンタケットのジョンは、その名が示すとおり、アメリカ北東部に位置するナンタケット島に生まれ育った。ナンタケット島は18～19世紀にかけて捕鯨産業の拠点となった島であり、『パワナ』においてその繁栄振りは、クジラを解体する斧や鋸の音、港内のドックに流れ込む夥しい血や鼻をつく強烈な臭気を介して生き生きと描写されている。こうした島の活況を背景に育ったジョンは、島の大人たちの交わす会話を通じて「伝説の潟湖」の存在を知り、いつか実際にその場を訪れることを夢見ていた。

幼いころから、わたしはそこへ、すべてが始まりすべてが終る場所へ、行きたいと夢みていた。なにか隠れ家のこと、宝物のことで話のように、彼らはその場所のことを話していた。ナンタケットでは、酔ったときのような話しかたで、彼らは皆こぞってその場所のことを話していた。彼らは言っていた、かの地に、カリフォルニアに、大洋に、鯨たちが子供を産みにくるその秘められた地、老いた牝の鯨たちがもどってきて死んでゆく秘められた地があると²⁸⁾。

²⁷⁾ *La Fête chantée*, p.185.

²⁸⁾ *Pawana*, p.11.

18歳になったジョンが、捕鯨船リオノー号の乗組員となったのは、幼少の頃より見ていたこの夢を実現するためであった。つまり、ジョンにとっては「伝説の潟湖」の探索そのものが航海の目的だったのである。

プンタ・プンタを離れて数日、スカモン船長とジョンとを乗せたりオノー号は、ついに「伝説の潟湖」に辿りつく。しかし、その発見の後には「人間が作り出される前、世界が元初のときにそうであったに違いないようなすがたで、かつてはまことに美しく、まことに汚れのなかった地は、殺戮の場²⁹」と化してしまうのである。潟湖の入口は多くの船で塞がれ、クジラたちは張り巡らされた罟を逃れようと空しく周回をつづけるばかりであった。仔クジラをかばう牝クジラをめがけて爆発性の銃が発射され、流れ出るクジラの血が、潟湖から溢れ浜辺を染めていた。

捕鯨船の乗組員になった以上、自身の夢の実現にクジラの殺害が伴うことは、ジョンも十分承知していたはずである。しかし、彼が目撃した捕鯨の実態は、想像をはるかに超えた残酷なものであった。そもそも捕鯨に対するジョンのイメージは、老インディアンジョン・ナティック（ナティック爺さん）の話を通じて培われたものだったのである。

幼いジョンは、ナティック爺さんのもとを頻繁に訪れては、彼の語る思い出話に熱心に耳を傾けていた。島にまだインディアンたちしかいなかった頃、彼らがどのようにしてクジラを捕らえていたのかを、身振り手振りを交えて再現してみせる爺さんの姿を見ながら、ジョンは、海の底深く潜っていく鯨の巨体や、海を染める赤い血の噴出をありありと思い浮かべていた。ところが、成人して捕鯨船に乗り組んだジョンが目目の当たりにしたのは、ナティック爺さんの語る捕鯨とは似ても似つかない、クジラ的大量殺戮を伴う近代的な商業捕鯨だったのである。

物語中、ジョンの語りを支配する失望と怒りは、幻滅を引き起こした商業捕鯨のあり方に向けられているのであり、だとすれば、ジョンの語りを通じてル・クレジオが問おうとしているのは、クジラを殺すことではなく、その殺し方であるといえるだろう。この点に、動物愛護の啓蒙書とは一線を画す『パワナ』の複雑な性格を読み取ることが可能である。それではル・クレジオは近代的な商業捕鯨の何を問題としているのであろうか。

6. クジラ虐殺の根拠としての「合理主義」

スカモン船長は、その末期にあって、クジラ的大量虐殺に先鞭をつけたことを甚く後悔し、悪夢のような回想を繰返す中で、ある事実を突き止める。それは、クジラの虐殺に際し

²⁹ *Ibid.*, p.58.

て自分たちが「思いやりを欠いていた」という事実である。

短艇は水を分けて進み、そしてインディアンの男の捕鯨砲が銆を発射すると、それは鯨たちの脇腹にめりこんで、さらに血を噴き上げさせた。私たちには思いやりがなくなっていた、思うに、私たちは世界の美しさについてもう何も分らなくなっていた。血の臭いに酔いしれ、いまわの際の息づかいとともに消えてゆく生命の音に酔いしれていた³⁰。

既に述べたように『パワナ』では、クジラを殺すことそれ自体が問題とされているのではない。そうすると、スカモン船長のこの独白を、単に、動物愛護の精神の重要性を訴えたものと解釈することはできないであろう。それでは、クジラに対して思いやりをもつこととは、いったい何を意味するのであろうか。また、クジラに思いやりを欠くことが、なぜ、クジラの大量虐殺へとつながるであろうか。

まず確実にいえるのは、クジラの大量殺戮は、捕鯨技術の発達無くしては不可能だったということである。ナティック爺さんが再現して見せたような、手投げの銆による捕鯨では、取れるクジラの数にも限界があったであろう。「魚雷発射砲や、電気銆や、巻揚機や、綱鎖や吊鉤が³¹」装備された船の登場を俟ってはじめて、僅か数年のあいだに何千頭ものクジラを殺害することが可能となったのである。だが、ここで注意したいのは、技術の飛躍的な発展は、合理主義的な世界認識によってもたらされたということである。

合理主義的な世界認識の出発点は、自然の対象から心的な要素を排除することに求められる。それによって自然は事物化され、そのうえで、われわれの主観からも独立した、事物そのものの普遍的な関係である法則を、理性によって把握することが目指されたのである。結果として、事物は理性の名の下に、人間の支配下におかれることとなる。この際、「事物を支配するための、客観的な知識にもとづいた、精密な法則的認識」は「科学」とみなされる³²。そしてその「科学」は、「事物を支配するための、客観的な知識にもとづいた、精密な法則的認識として、「技術」の発展の基礎をなすとともに、逆に、発展した「技術」を媒介に「科学」的認識はいつそう推し進められる³³」のである。

クジラを大量に殺戮するためには技術の発展が不可欠であり、その技術の飛躍的な発展のためには、自然の対象から心的な要素を排除するという操作が前提とされる。その操作を極端にまで推し進めるのであれば、動物とは結局「自動機械」にすぎなくなる。そうであるならば、クジラにたいして「思いやり」を持つことなど、無益で非合理的な発想にすぎないであ

³⁰ *Ibid.*, p.73.

³¹ *Ibid.*, p.75.

³² 中村雄二郎『哲学入門 生き方の確実な基礎』、中公新書、1993年、77頁。

³³ 同上、75頁。

ろう。こうして、クジラの大量殺戮に伴う良心の呵責は、理性の名の下に斥けられ、結果として、何千頭ものクジラが殺され、解体され、鯨油へと変えられたのである³⁴。そうすると、いまわの際のスカモン船長が発する「私たちには思いやりがなくなっていた」という科白に、『メキシコの夢』と通底する「理性ある人々³⁵」への批判を読み取ることができるだろう。

7. 「魂の喪失」、あるいはシャーマンとしてのナンタケットのジョン

「私たちには思いやりがなくなっていた」というスカモン船長の科白は、動物愛護精神の必要を説くものではなく、商業捕鯨によるクジラの虐殺の根拠となる合理主義を批判したものと読むことができた。クジラの大量虐殺は、それを可能とする技術力のもとより、その技術の進歩を支える合理的な世界認識を前提とすることで初めて可能となったのである。

合理主義は、その出発点において、自然の存在物から「魂＝精神」といった心的要素を排除するという操作を行った。その操作によって、人間による自然の支配という非対称的な関係が生じることとなる。自然に向けられる人間の暴力は抑制を失い、それはやがて、地球の温暖化やオゾン層の破壊というかたちとなって人間自身の身にはねかえってくることになる。『メキシコの夢』においてル・クレジオが「西欧人は不均衡状態の中に位置し、自らの暴力にひきずられている」と述べるのは、このような事態を指してのことであろう。

ル・クレジオはこうした西欧世界の現状に危機感を抱き、合理的思考によってもたらされる災厄を、インディオの呪術的思考の力を借りて「悪魔祓い」しようとするのである。ル・クレジオの言葉を借りるのであればそれは、現代社会において「シャーマニズムの相続」を試みることでありといえるだろう。このような文脈において興味深いのは、クジラの虐殺とそれにともなう環境の破壊を主題とする『パワナ』が、ル・クレジオ自身による「シャーマニズムの相続」の文学的な実践であったとみなしうる点である。

クジラの虐殺を回想するなかで、スカモン船長の脳裏にひときわ鮮やかに浮かび上がるのは、ジョンの眼差しである。

あるとき私と同行した者たちすべてはあれを忘れてはいない、一等航海士のロイスも、ナンタケットの鉈打ちも、はじめて鯨捕りにきて、まるでこの私がなにか禁じられたこと、呪われたことをやっているかのように、私をじっと見つめたあの若者も。〔中略〕

³⁴ 「潟湖はもはや秘境でなくなり、私のものでなくなっていた。それは克鯨たちが捕らえられる罌、生まれたての子供と一緒に鯨を殺す罌だった。身体を貫かれ、母船まで引かれてゆき、吊鉤でくくりつけられ、浜辺で解体され、鯨油樽に変えられた鯨は何千頭になるだろうか」 *Pawana*, p.76.

³⁵ *Le Rêve mexicain*, p.89.

ある何頭かの手負いの牝鯨は浅瀬まで短艇を引きずっていったので、砂洲に坐礁しないように斧で麻綱を切らなければならなかった。鯨たちはそこで死に、そしてその骸骨は漂流物のように腐っていった。

私たちと一緒にだったあの少年の眼差しを私は思い出す³⁶。

このように、クジラの虐殺に際して思いやりが欠如していたという事実は、ジョンの視線に曝されることによって明らかとなるのである。このことを踏まえたうえで、あらためて「わたしたちには思いやりがなくなっていたNous n'avions plus d'âme.」というスカモン船長の科白に注目したい。この科白を「思いやりがなくなっていた」と訳すのは、「情があるavoir de l'âme」という成句の意味を踏まえてのことである。しかし、この科白はまた「わたしたちは魂（âme）を失っていた」と読むことも可能なのである。

「魂」を失うこと、これはシャーマニズムにおいてよく知られた主題である。例えば、ミルチャ・エリアーデは、その『シャーマニズム 古代的エクスタシー技術』のなかで、魂の喪失と病の発生の密接な結びつきを説明している。魂が迷子になるか、盗まれたために病が生じる、そのため、病気を治療するには、失われた魂を見つけて捕らえ、患者の体内に戻してやる必要があるのである³⁷。『メキシコの夢』のなかで、ル・クレジオが、エリアーデのこの書物についての言及を行っていることを考慮するのであれば³⁸、ル・クレジオが、シャーマニズムにおける、魂の喪失と病の関係を知っていたことは、ほぼ間違いない。そうすると、魂の喪失を透視するジョンの眼差しに、シャーマンの眼差しを重ねることが可能となるのではないだろうか。

とはいえジョンは、クジラの虐殺に合理主義的な思考の抱える危機的兆候を見て取る反面、その危機を回避するため、積極的な働きを行っているようには見えない。商業捕鯨に伴う巨大な暴力を前に、ジョンはひたすら無力なのである。それでもジョンは、シャーマンとしての役割を立派に果たしているものとみなしうるのだが、その点を理解するためには、「歌の祭り」におけるシャーマンの役割を確認しなければならない。

既に述べた通り、インディオとの共同生活のなか、ル・クレジオに強い衝撃を与えた「歌の祭り」は、シャーマンによる治療のための儀礼であった。この儀礼には、役割の異なる二人のシャーマンが必要とされる。一人はイワ・トバリ、もう一人はアイバナと呼ばれるシャーマンである。まず、イワ・トバリがトランス状態に陥り、病の原因を明らかにした

³⁶ Pawana, pp.72-75.

³⁷ Mircea Eliade, *Le Chamanisme et les techniques archaïques de l'extase*, Payot, 2015, p.204.

³⁸ 「神話、慣習、呪術の祭儀の不可分な混淆であるその宗教は、舞踏や幻視の中で他界と交流しながら部族や家族の中で行われる信仰のもとに実行される。それは何よりもミルチャ・エリアーデの述べたエクスタシーの宗教である」 *Le Rêve mexicain*, p.181.

後、アイバナによる治療が行われるのである。イワ・トバリの主催する儀礼は「タウサ（見ること）」と呼ばれる。一方、アイバナの行う儀礼は「ベカ」、すなわち「歌の祭り」と呼ばれるのである。

「インディオ体験」のさなか、ル・クレジオに秘儀を伝授したのは、イワ・トバリの一人とされている³⁹。そうすると、イニシエーションの儀礼を通じて、ル・クレジオにはイワ・トバリの能力、すなわち危機の原因を見極める能力が授けられたものと推測されるであろう。本稿の文脈において注目したいのは、『パワナ』におけるジョンもまた、「歌の祭り」でイワ・トバリに期待される役割を果たしているということである。シャーマンとしてのジョンは「タウサ（見ること）」を通じ、「金持ちになる」という欲望によって引き起こされたクジラの虐殺に、「理性ある人々」が陥った危機的な状況を見て取っているものと考えられるのである。

8. 結論にかえて

環境問題に対するル・クレジオの関心は、インディオとの共同生活の中で体験した「シャーマニズム」の、その今日的な意義を問うなかで芽生えたものと考えられる。その意味において、環境問題を扱った『パワナ』は、『メキシコの夢』の系譜を継ぐ作品だといえる。『パワナ』では、ナティック爺さんの語るインディアンの伝統捕鯨との対比において、クジラの楽園を破壊した商業捕鯨のあり方が問題とされるのであるが、この構図は、メソアメリカ文明との対比において近代文明のあり方を問うという『メキシコの夢』の構図をそのまま引き継いだものである。また破壊をもたらす原因として、「黄金郷」の伝説に象徴される、現世的な富の追及が問題とされる点においても両者は共通している。

このように主題や構成のうえで『メキシコの夢』と大きく重なりながら、『パワナ』の新機軸というべきは、その執筆がル・クレジオ自身による「シャーマニズムの相続」の文学的な実践とみなしうる点に求められるだろう。

人間以外の自然物から、思惟能力をはじめ「魂＝精神」といった心的要素をすべて除外することによって成立した合理主義ではあるが、実際に「魂＝思いやり」を喪失しているのは、むしろその合理主義的世界観に立つ「理性ある者」たちの方であった、これがジョンの眼差しを介して明らかとなる逆説である。ただし、合理主義に根ざした社会の発展の先に、環境破壊に代表される人類を巻き込む世界規模での危険が待ち構えていることを考えるのであれば、「魂＝思いやりの喪失」は、単なる事実確認ではなく、危機的兆候の象徴的な表現

³⁹ Magazine littéraire, p.33.

と解すべきであろう。要するに『パワナ』では、クジラの虐殺の前提となる合理主義が批判されるだけでなく、その合理主義に基づいて発展してきた西欧社会が危機的状況に陥っていることが、「魂の喪失」というシャーマニズムの主題を借りながら、象徴的に表現されているのである。この点に、『パワナ』に込められた、エコロジーの平面には収まることのない「ル・クレジオの作意」が見て取れるであろう。

また、「シャーマニズムの相続」という観点からすると、クジラの虐殺に際して自分たちが「魂を失っていた」ことをスカモン船長に自覚させるジョンの眼差しは、「歌の祭り」におけるイワ・トバリの「タウサ（見ること）」になぞらえられる性質のものであった。そうすると『パワナ』とは、呪術的な治療の前段階に相当することとなり、この後には当然、アイバナによる「悪魔祓い」、すなわち「ベカ（歌の祭り）」が続くものと予想されるであろう。

実際、『パワナ』発表前後のル・クレジオの活動に目を向けるのであれば、そこには「歌の祭り」に相当する活動の展開が見て取れるのである。今日、アイヌの文化に寄せられるル・クレジオの関心もまた、このことと無関係ではないと考えられる⁴⁰。この点に関しては、また機会を改めて論じてみたい。

⁴⁰ 1990年代半ば、ル・クレジオの発案によりアイヌの神謡のフランス語訳が出版された。2000年代になると、ル・クレジオは二度に渡って北海道を訪れ、アイヌ文化との交流を重ねている。さらに、2011年末から2012年初頭にかけてルーヴル美術館で開催された自身の企画展にアイヌの芸術家を招待している。